

## 真実への旅

龍郷町立赤徳中学校 一年 坂元 遊野

ザワザワと風に吹かれて、サトウキビがゆれている。私はその中に一本だけ立っているガジュマルの樹に登り、背を幹に預けてその風景を見渡している。向こうには、美しい海が広がっている。右の方から続く山には、点々とヒカンザクラが咲いている。別の山は、すっかり葉ザクラとなっている。左の山は秋の始まりのようにちらほらと紅葉で赤や黄に染まった葉が見えている。空には入道雲が見えている。…ここにいるのは、私だけ。

ジリリリリ。目覚まし時計の音で、私は目を覚ました。起きて私一人。

私は海華<sup>みか</sup>、自分が一人だと感じている。学校では、誰とも分かり合えない。いじめられているわけではない。授業はおとなしく聞き、休み時間は読書などをして、暇をつぶす。特に誰とも会話しない…。家に帰っても、誰もいない。父さんは幼い頃に亡くなった。母さんは仕事で朝早くから夜遅くまで働いている。小学校の頃は何人かが仲良くなるうと話しかけてくれたりしたけど、話が噛み合わず、しだいに皆離れていった。

その子達の内数人は同じ中学に入学したが、自分から話しかけようとは思わない…。いや、できない。本当は私も仲良くおしゃべりしたい。一緒に遊んだりしたい。でも、もし拒まれたら…。もしあの子達が迷惑だと思いなから私に付き合って友達ゴツコをするんだとしたら…。そう思うと、怖くて言い出せない。そう、私は臆病なのだ。自分が傷付くのを恐れて何もしない臆病者。

今日は夏休みの前の終業式。まだ少し早いけど行こう。朝はまだ涼しくて、気持ちいい。っと何だろう、今何か赤いものが…。あれだ！よく見ると、それは蝶だった。ハイビスカスの流した涙のような赤。それがひらひらと舞っていた。かなり大きい。すると、その蝶は私を誘うように、飛んでいった。私は考えるより早く、魅せられたように追っていった。

いつのまにか、目覚めのない場所に來ていた。すぐ先には、大きなガジュマルの木が立っている。すると、蝶はガジュマルの木の作るアーチをくぐり、掻き消えたように見えなくなった。ガジュマルにはブルーゲンピリアが巻き付いて、アーチを美しく引き立てていた。ふとアーチの中を覗いて驚いた。海が見えるのだ。ガジュマルの後ろに回っても、森があって海は見えない。もう一度アーチを覗いた。やはり、海が見える。私は

気が付くと、アーチの中へと入っていった。

風が、サアツと吹き抜けていった。…ここは…朝見た夢と同じだ。似ている場所ではなく、夢の場所だと、私はなぜか思った。何の気なしに後ろを振り返ると、アーチの向こうは今までの所と違う場所だった!?まさか…帰れない?怖々とアーチをくぐった。でも、そのままだった…。

「クスクスクスッ」

後ろで急に笑い声がした。振り向いたけど、誰もいない。

「誰?どこにいるの!？」

「秘密だよ。」

その誰かは楽しそうに言った。声の調子から悪意はなさそうだが、教えてくれるつもりもなさそうなので、質問を変えてみた。

「ここはどこなの？」

「真実のいる所だよ。」

また、その誰かは笑うように言った。

「意味の分からないこと言わないで。それに真実だなんて。ここは四季もメチャクチャじゃない。バカにしないで！」

この世界から帰れないかもという思いで、苛立つてはいたが、それは事実だった。夢と同じように、とっく

に散ってしまったはずのヒカンザクラが咲いている。紅葉している場所もある。まるで四季が全部あるようだった。気温は奄美らしくない、暑すぎない温度だった。

「本当だよ。それに、ここにいる人達はみな本心を語る。ここには、真実しかないんだ。みんなに会ってきなよ。中にはあんたの知ってる人もいるよ。真実を見たら、帰る方法を教えてあげる。じゃあね。」

そこまで言うのと、そいつはいなくなった。姿はもともと見えなかったので、気配が消えた事からそう思った。

「意味分かんない。」

ここが違う世界なのは分かる。そう感じるのだ。

「ここにもいても仕方がない。」

自分自身に言いかけせるように言った。そうでもしないと怖じ気づいてしまいそうだから。でも、どこに行こう。そう考えた時、ふと海が目に入った。そうだ、海に行こう。ここから近そうだし。私は何故かそう思った。

しばらく歩くと道に出た。道といっても舗装されていない、でこぼこの土の道だった。それでも人が通るようで、広くしつかりしていた。私は、この道に見覚えのある気がした。考えてみて、思いあたるものがあった。通学路にそっくりなのだ。通学路は舗装されて

いるが、曲がり具合や道幅、周りからの風景が似ているのだった。…バカバカしい。でも、この道を通っていけば誰かいるだろう。そう考えて歩いて行った。すると、学校があった。…どうして!? 学校は、私の通う中学とそっくりだった。私の通う中学は鉄筋コンクリート建て。ここは木造だったが、造りや時計の位置などが同じだった。…まるで、この世界は元の世界のコピーの様だった。違うのは人工的な物の多くが、自然的なものに変わっていることだけ。しばらく呆然と見ていると、ちらほらと数人が登校してきた。その姿を見て更に驚いた。制服が同じなのだ。すると、その中に一人のよく知っている顔を見つけた。珊瑚だった。一人でいた時、一番声をかけてくれる子だった。明るく優しい活発な子だった。すると、珊瑚が声をかけてきた。

「おはよう、海華さん。早いね。今日は私も早く来たんだ。ちょっと話さない?」

明らかに私を知っている口ぶりだった。

「ちょっと待って。どうして私のことを知ってるの?」  
そう聞くと、珊瑚は困ったような顔をした。

「分からない。でも知ってるの。前からずっとあなたと友達になりたいと思ってた気がする。」

私はその言葉に驚いた。そして、あいつが言っていた

事を思い出した。「ここは真実のいる所…この人達は本心を語る…」でも、どうして私なんかと友達になりたいんだろう。私は思い切って聞いてみた。

「ねえ、どうして私なんかと友達になりたいの? 他にもいい友達はいっぱいいるんじゃない?」

すると、珊瑚は楽しそうに言った。

「だってあなたは、とっても優しいでしょ。前に怪我をした鳥がいた時、連れて帰って自分の家で治療してあげたり、雨の降った日に、小さな子がカサを忘れて困ってた時に、自分のカサに入れて、その子の家まで送ってあげたり。その姿を見た時から、友達になりたいと思ったの。私なんかって言わないで。もっと自分に自信を持ってよ。」

そう言ってくれて、とても嬉しかった。そして、何故かここにいる珊瑚は、私の世界の珊瑚だと分かった。

「ありがとう。」

そう言うのが精一杯だった。

「それじゃあ、今度一緒に遊ぼう。私、ちょっと用があるから、先行ってるね。じゃあね。」

そう言って珊瑚はパタパタと走って行った。

「一緒に遊ぼう。」

その言葉が、とても嬉しかった。

「真実が分かったかい。」

急に後ろで声がした。でも、振り返ってみても誰もいない。どこかに隠れているのだろう。そう思いながら返事をした。

「分かったよ。」

すると、あいつは、

「でも、この世界での出来事は、あっちの世界に伝わらない。向こうの世界で友達になれるかはあんた次第だよ。」

私は頷いた。もう怖くない。

「もう平気だね。じゃあ帰してあげる。」

そう言ったかと思うと、突然すぐ隣にあったガジユマルが、ぐにゃっと歪んだかと思うと、アーチができた。

「待って、姿を見せてよ。」

「やーだよ。」

そいつは、最初の頃と同じように、楽しそうに言った。

「じゃあ、名前、教えてよ。」

「…島人。しまんちゅって書いて島人だ。」

「島人。いい名前だね。色々ありがとう。」

「う、うるせえ。早く行け。」

照れたのかなあ。アーチに入りながら私はもう一つ聞いた。

「また…会えるかな？」

「さあな。」

「本当にありがとう。バイバイ。」

そう言った後、私はアーチをくぐった。

…ここは…最初に蝶を見た場所だった。慌てて近くの時計を見る。七時三〇分。蝶を見た時から進んではいなかった。どうやら向こうにいた時、こちらの時間は進んでいなかったようだ。さあ、私にはやらないといけないことがある。私は学校に向かった。

教室で珊瑚が登校してくるのを待つ間、私はずっとドキドキしたままだった。ガラツ。教室のドアを開けて、珊瑚が入ってきた。

「おはよう、海華さん。早いな。今日は私も早く来たんだ。」

「お、おはよう。」

ねえ、私と友達になってくれる？そう聞こうとしたが、また声が出なかった。やっぱり怖い。

『勇気だせよ、海華。』

ふいに、島人の声が聞こえたような気がした。いや、聞こえた。すると、恐れが消えていった。

「ねえ、珊瑚さん。」

「なあに。」

「私と、友達になってくれる？」

すると、珊瑚は驚いたような顔をした。やっぱりダメか。

「いいよ。いつしよに遊ぼう。」

えっ？顔を上げると、珊瑚が私に向かって、手をのばしてきた。

「ありがとう。」

私はそう言つて、手を握り返した。

∴あれから一ヶ月。私は珊瑚や、他の友達と、よく遊んだりするようになっていた。でも、島人とは会えずにいた。蝶を追つて行った場所を探したが、ガジユマルも、赤い蝶も見つけられなかった。でも、島人は私を見守っている。そんな気がする。ありがとう、島人。

「海華ーっ、遊ぼー。」

「うんっ。」

私はそう言つて、みんなのもとへ駆け出していった。